

第2部 分析編

第2章

無職の若者の世界

神田和恵（1～3節）

この章では、特定の仕事に就いていない若者に焦点をあてて分析を行う。第1部でアンケートデータをもとに全体傾向を把握したところ、無職の若者は有職者や専業主婦と比較して、人間関係や生活に対する評価が低いことがわかった。また、子ども時代の体験に対する評価も全般的に低かった。しかし、「無職」とはあくまで「ある時点で特定の職に就いていない」という状態であり、それゆえに多様な生き方・考え方が並存していると考えられる。ここでは、個別のインタビュー事例を踏まえつつ、無職の若者の実態を明らかにしていきたい。

事例の紹介<4名>

※いずれの事例も、回答者ご本人の承諾を得て掲載しています。

はじめに

この節では、無職の若者4名を対象に行ったインタビューを中心に紹介する。今回の調査における「無職」とは、アンケートを実施した2006年1月時点で特定の仕事に就いておらず、かつ「専業主婦」（無職のうち既婚女性）を除いた者である。したがって、なかには積極的に求職活動をしているケースも含まれており、アンケート調査後のインタビューを行った時点では、実際に仕事に就いているケースもみられた。

なお、インタビューに協力していただいたのは、以下に示した4名である。いずれも、首都圏在住で、過去に職場経験のある若者で

ケース1 Gさん 男性33歳 無職 両親と妹と同居 130

ケース2 Hさん 女性34歳 無職 両親と妹と同居 132

ケース3 Iさん 男性35歳 無職 1人暮らし 134

ケース4 Jさん 女性33歳 無職 パートナー（未入籍）と同居 子ども1人（1歳男児） 136

【アンケートデータからみる無職（n=118）の基本属性】

表2-1-1 性別

	度数	%
男性	68	57.6
女性	50	42.4
合計	118	100.0

表2-1-2 年齢

	無職全体	男性	女性
20代	41.5	41.2	42.0
30代	58.5	58.8	58.0

注) 平均年齢 無職全体 30.1歳、男性 30.2歳、女性 30.1歳。

表2-1-3 同居している人

	無職全体	男性	女性
配偶者	2.5	4.4	—
子ども	4.2	1.5	8.0
あなたの父親	65.3	69.1	60.0
あなたの母親	72.0	70.6	74.0
その他	32.2	27.9	38.0
あなた自身のみ（一人暮らし）	14.4	17.6	10.0

注) 複数回答。

表2-1-4 最終学歴

	中学校卒	高校卒	短大・高専・専門学校卒	大学卒	大学院卒
無職全体	6.8	25.4	35.6	28.8	3.4
男性	8.8	22.1	29.4	35.3	4.4
女性	4.0	30.0	44.0	20.0	2.0

注) 最終学歴…各サンプルについて、「高校」「短大・高専」「専門学校」「大学」「大学院」のそれぞれを卒業したか否かを判別し、いずれの学校段階も卒業していない場合を「中学校卒」、「高校」は卒業しているがそれ以外は卒業していない場合を「高校卒」、「短大・高専」または「専門学校」を卒業しているが「大学」「大学院」は卒業していない場合を「短大・高専・専門学校卒」、「大学」は卒業しているが「大学院」は卒業していない場合を「大学卒」、「大学院」を卒業している場合を「大学院卒」として最終学歴を定義し、算出した。



Gさん 男性33歳 無職 両親と妹と同居

人間関係で本当に頼れる存在はない。人とつきあっていく方程式をどうやって自分なりに作っていくか、常に考えていた……。

●経歴

4年制大学卒業後、金融関係の企業に就職。支店営業、本社内部監査を経験。会社の都合でリストラされ、現在就職活動中。

●家族構成

両親・妹と同居。

●趣味

現代アート鑑賞。

●就職についての考え方

希望の仕事があれば働きたい。

●メディア接触時間・家族との会話時間

インターネット3時間、テレビ2~3時間、家族との会話30分。

●悩みや不安

働かないと生活していく。今の状態は異常だと思ってしまう。父親との関係がうまくいっていない。息子が無職で家にいることを快く思っていないようだ。

●人間関係

家族間では妹とよく話す。悩みの相談もあるが、自分自身はあまり人を頼らないようにしている。人間関係で本当に頼れる存在はないと思う。人との接し方では、「つかず離れずどうつきあっていくか」「人とうまくつきあっていく方程式をどうやって作っていくか」を常に考えていた。

●強み

与えられた仕事を着実にこなすこと、自分の感情を上手にコントロールすること。

●仕事での成功体験

「人や社会から尊敬されること」を重視している。顧客との信頼関係を築き、いかにお互い気持ちよく業務を行うかに注力した。信頼と評価を得て喜びを感じた。

●子どもの頃の家族の様子

両親とも人づきあいはあまりよくなかった。両親は仕事や子育てのこと、住宅ローンのことなどそれが悩みや不安を抱えており、そのため、ささいなことで言い合いになり、けんかをすることがあった。教育方針としては、子どもにはやりたいことをやらせてくれていた。

小学生時代

小学校4年生の担任教師の対応に不信感をもち、その頃から教師に対して距離を置くようになった。また、高学年になってから、いじめにあった。「自分ってこんなもんなんだ」と重く受け止め、「とにかく我慢しないどこの中では生きていけない」と思い、誰にも相談せずに耐えていた。

中学生時代

吹奏楽部で活躍。先輩たちにもかわいがられていた。しかし、クラスの友だちの場合は一緒にいる時間が長いため、クラスで友だちを作ることには慎重だった。

Q 親離れしたきっかけは？

A 今でもできていないかもしれない。しかし、中学生の頃から自分で決めたことに関して親は口を出さなくなった。自己管理できるようになったのは高校生になってから。家族との接点をみつけ、それに合わせて生活ができるようになった。

高校生時代

技術系の高校に進学したかったが、両親や親戚の反対で普通科に進学。今回私が職を失ったことを受けて、父親は技術系の高校に進学させなかったことを後悔しているようだ。

大学生時代

数字に対する興味が強く、世の中を動かしているものを体系的に学ぶために商学部を選択。浪人中、美術館で現代アートに触れ、衝撃を受けた。自分の物の見方が大きく変わり広がっていった。

就職

金融関係の企業に就職。目標に対して数字で達成することや顧客との信頼関係をいかに築き保てるかという仕事は大変だった。早朝出勤し、帰宅は23時を回ることが多く、肉体的にもかなりハードであったが、やりがいは大きかった。

退職

社会環境の変化により、経営主体が変わり、ドライな社風になった。昨年の夏、企業の業績不振のためにリストラされた。

現在

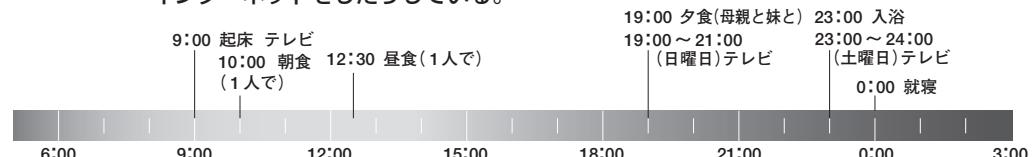
インターネットで就職情報を検索してエントリーし、週1~2回程度面接を受けているが、なかなか思うように進まない。就職活動をしている今の自分の状態を異常だと思っている。働けるものなら今すぐにでも働きたい！

1日の過ごし方

月～金曜日 就職活動中なので、ネットをチェックしてから外出することが多い。夕食は家族とる。



土日・祝日 土日はたいてい1人で買い物に出かける。家にいるときは部屋の片付けをしたり、インターネットをしたりしている。





ケース 2 Hさん 女性34歳 無職 両親と妹と同居

今はただ遊んでいるだけの生活。その時は楽しいが、「このままではいけない！」というあせりと反省の気持ちが湧き起こる。日々その繰り返し……。

●経歴

専門学校在学中からアルバイトしていた会社に就職。6年前に倒産。次の仕事のために資格を取得し2年ほど派遣社員として勤務。そこで、雇用条件について話の行き違いが生じ退職。無職となり5年目。

●家族構成

両親・妹と同居。外出などの費用は親が用意してくれる(月10万円)。

●趣味

テーマパークとコンサートに行くこと、インターネット。

●就職についての考え方

働いても働かなくてもどちらでもよい。

●メディア接触時間・家族との会話時間

インターネット4~5時間、テレビ2時間、家族との会話30分。

●悩みや不安

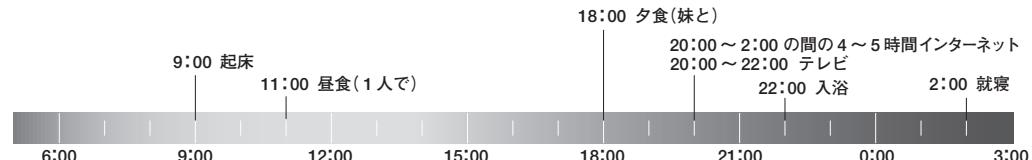
今は遊んでいるだけの生活。遊んでいるときは楽しいが、「このままではいけない」と反省する。

日々その繰り返しである。

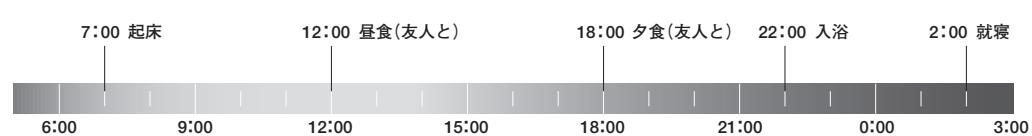
働いていないので、欲しいものが自由に買えない。洋服やブランドバッグの購入を我慢している。

1日の過ごし方

月～金曜日 外出は週に3~4日しており、コンサートやテーマパークに出かける。インターネットは4~5時間。ネットショッピングや懸賞をしている。



土日・祝日



Hさんのこれまでの歩み

小学生時代

両親から甘やかされて育った。何かを我慢させられたという記憶があまりない。欲しいものは何でも買ってもらえたし、好きなことを何でもさせてくれた。

中学生時代

勉強に関しては、両親から褒めてもらいたくてがんばっていたように思う。どの教科もまんべんなく勉強し、何でも夢中に取り組むタイプだった。

高校生時代

自分で公立高校に進学を決めた。自由な校風と友だちの影響でまったく勉強しなくなった。友だちとコンサートや小旅行に行くことに楽しみを覚えてしまった。

専門学校生時代

高校卒業後は、服飾系の専門学校に進学した。そこでスタイリストの仕事にあこがれ、将来はアパレル関係の裏方の仕事に就こうと思っていた。

就職と退職

専門学校時代の夏休みにアルバイトで印刷関係の仕事をした。職場の雰囲気がよかつたのでその後もアルバイトを続け、そのまま誘いに応じて就職を決めた。

時間に追われる仕事で大変だったが、やりがいはあった。ITの急速な発展により会社が倒産。仕事がなくなることはわかっていたので、他に仕事を得るための資格取得のために勉強していた。

資格取得後は、派遣社員を2年ほどしていた。そこで正規社員への話を持ちかけられたが、行き違いが生じ、正規社員になることができなかった。初めて人間関係で不安を覚えた。

会社が倒産したことと正規社員採用の話が流れてしまったことに対するショックは大きかった。とくに再就職先で正規社員として採用されなかったときは、「あんなにがんばっていたのに裏切られた…」という思いが強かった。

現在

Q 親離れしたきっかけは？

A 現在もできないように思う。小さいときの親子関係のままのように思える。親は離れてほしいようだが、自分のほうがくっついているという感じである。

「今まで働いていたのにこのままではいけない」というあせりの気持ちはある。ネットで求人情報を検索してみるものの、思いのほか、時給が安く条件もよくないので、働く意欲が減退してしまう。再就職先での人間関係の挫折から一步が踏み出せない状態である。

ケース

3

さん 男性35歳 無職 1人暮らし

会社の倒産で定職につけない状態。前職は残業が多く拘束時間が長かったので、今度は「生活」を優先し時間的にゆとりのある仕事に就きたい！

●経歴

4年制大学卒業後、食品関係の会社に就職。ルートセールスを担当していた。
会社の倒産で退職し、2年前から定職についていない。現在就職活動中。

●家族構成

家族は両親と兄・妹の5人家族。大学卒業後より、1人暮らし。実家は近所にある。生活費はアルバイト*と貯金を切り崩している。

*アルバイトをしているが、定職についていないことが理由で、ご本人は無職と認識。

●趣味

趣味はサッカーやテニスの観戦、美術館に出かけること、区民農園での作物栽培。

●就職についての考え方

自分のやりたいことを重視している。やりがいのない仕事に就いてもしょうがない。自分にとってのやりがいとは成果がみえることである。

●メディア接触時間・家族との会話時間

インターネット3時間、テレビ30分、家族との会話30分。

●悩みや不安

このままでは将来がみえない。現在の収入源がアルバイトのみなので、収入が安定しない。

●人間関係

家族との関係は良好。困ったときの相談は両親になると思う。職場での人間関係は良好であった。仕事上の悩みは上司に相談し、わからないことは臆することなく聞けた。

●強み

与えられた仕事を着実にこなすこと、自分の感情を上手にコントロールすること。

●結婚願望・理想とする将来像

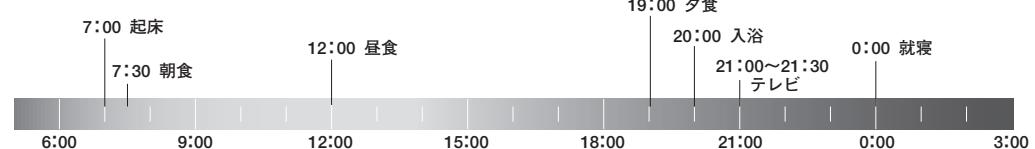
自分のペースで生活できたらいいなと思う。以前の仕事は残業も多かったので、今度仕事に就くときは時間的にゆとりのある職場を考えている。結婚願望はない。

●子どもの頃の家族の様子

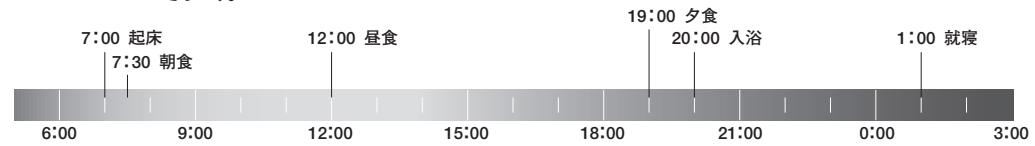
人づきあいもほどほど。夫婦でテニスを趣味としていたので、子どもの頃は親と一緒にテニスをしていた。兄妹の仲もよかったです。

1日の過ごし方

月～金曜日



土日・祝日 サッカーや美術館の企画展に出かけることが多い。外出先でも外食せず自分で用意していく。



小学生時代

小学生時代に両親に連れて区民農園に行き、そこで作物を種から育てる楽しさに魅了された。この体験がその後の自分の進路に影響を及ぼすことになる。

中学生時代

中学生時代は、部活動には入らなかった。学校外のテニススクールに通っていた。勉強については、試験が近くなると計画を立てて自主的に取り組んでいた。この頃から大学受験まで、塾や予備校の講義や通信添削を受けずに参考書で独学していた。

高校生時代

農業高校に進学、部活動で花を育てていた。花を育てることは楽しかった。

大学生時代

大学は農学部に進学した。進路については自分で決め、両親もそれを尊重してくれた。「農業」と「理科」の教員免許を取得した。

Q 親離れしたきっかけは？

A 大学卒業後、実家を出て1人暮らしを始めてからである。いつまでも親に頼ってはいられないと思った。その頃から自己管理もできるようになった。

就職

大学4年生の時は就職活動を行わず、独学で公務員試験の勉強をしていた。しかし、希望がかなわず1年間のブランクを経て仕事を探し、食品関係の会社に就職した。仕事は得意先のスーパーを回るルートセールスだった。キャンペーンで自社製品が売れたときなどはやりがいを感じていた。

退職

退職理由は、会社の倒産。業績悪化の前兆はあったので、しょうがないかなと思ったくらいで、とくに残念だとは思わなかった。

現在

1年前から週に1～2回ほどハローワークに行き求人票をみたり、面接にかけたりしている。しかし、このままでは将来がみえない！現在の収入源がアルバイトなので安定した収入が欲しい。できるだけ早く再就職を決めたい。



4
Jさん 女性33歳 無職
パートナー（未入籍）と同居 子ども1人（1歳男児）

母親が亡くなりつらい時期もあったが、試行錯誤しながら乗り越えた。今は、子どもがでて大きな責任を感じている。

●経歴

4年制大学卒業後、SEとして勤務。働いている目的が合わないために退職。その後派遣で数社経験する。妊娠により退職。

●家族構成

16歳年上のパートナー（未入籍）と1歳の男児と同居。生活費・養育費はパートナーと半々くらい。

●趣味

整体、ヨガ、スイミング、心理学。

●就職についての考え方

子どもが1歳になるまで仕事を決めようと思っている（2006年1月現在）。

●メディア接触時間・家族との会話時間

インターネット1時間、テレビ3～4時間、家族との会話30分。

●悩みや不安

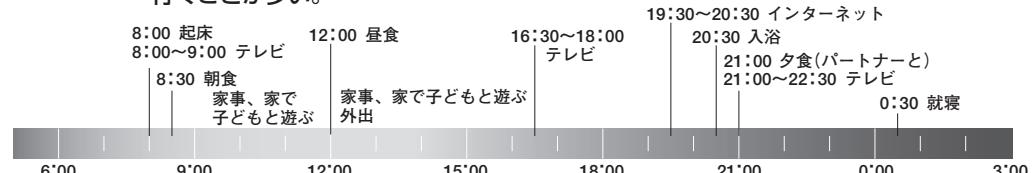
経済的にもう少し収入が欲しい。パートナーとの関係も形にして確実なものにしていきたい。

●人間関係

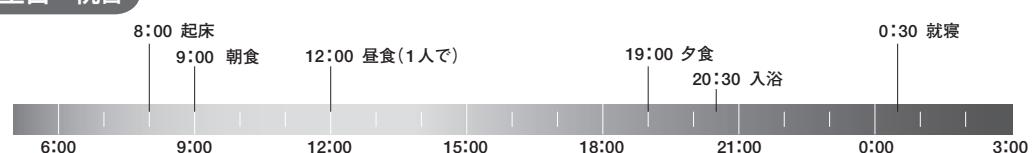
人間関係に問題が生じると昔は議論したが、今はどうして違和感があるかを心理学的に考える。その人の身になって考えることで、苦手な人や嫌いな人が減った。感情をコントロールすることも以前よりうまくなり、へこんでも立ち直ることが早くなつた。

1日の過ごし方

月～金曜日 近くの公園で子どもと遊ぶことはほとんどない。出かけるときは学生時代の友だちの家に行くことが多い。



土日・祝日



Jさんのこれまでの歩み

小学生時代

小学生時代は、多くの習い事に通い、土日も塾があり休みがない状態。忙しくて友だちもいなかつたが、自分ではそれが当然だと思っていた。

中学生時代

中学生時代も塾通いはしていたが、少し余裕ができた。そこで初めて友だちができた。高校受験では志望校に入れず、自分の中では挫折と感じている。

Q 親離れしたきっかけは？

精神的に自立したなと思ったのは、中学生の時。親に隠し事を通せるようになつたり、親にしっかりウソをつけるようになつたり母親に対して自己主張できるようになつた。また、高校生の時、母親が病気で倒れ、家のことを自分が引き受けようになつた。

高校生時代

高校生の時、母親を亡くした。それまで勉強をがんばってきたのは、母親が喜ぶからだということに気がついた。母親を亡くして目標を失い悩み苦しんだ。迷ったままの状態で附属高校とつながっていた大学に入学を決めた。

大学生時代

大学生時代は、アルバイトで家庭教師などをいくつもかけもち、経済的にはかなり自立していた。親からの援助は全体の半分程度だった。

就職と退職

最初の就職ではSEとして開発に携わった。この仕事でいいのかと迷いながら就職を決めていた。仕事をしていくうちに目標を見失い、1年で辞めた。その頃から心理学に興味を持ちはじめた。

次に派遣で仕事を始めた。職場との相性もよく、やりがいのある仕事だった。心理学の勉強や習い事を続けていたが、部署替えで遅くまで残業が続き、習い事を続けるのが困難になり、退職。

その後、短期間の派遣を数社経験したのち、派遣でユーザーサポートの仕事に就いた。

古い体質の会社ではあったが、自分の勉強をするにはよい環境だった。

パートナーとの出会い

習い事を通して知り合つた。2人で話し合つて歩み寄つて同居している。妊娠した段階で、いつまで働きいつ復帰するかを考えた。パートナーと話し合い、子どもが1歳になるまで働かないと決め、仕事を辞めた。

現在

育児に専念でき、自分の設定した生活水準を達成できているが、経済的にも、子どものためにも、もう少し収入が欲しい。将来はセラピストになることが目標である。どんな仕事でもセラピストになるためのよい経験だと思っている。

● インタビュー事例よりわかること

以上、わずか4名のインタビュー事例ではあるが、現代の若者の悩みの一部が浮き彫りになったのではないだろうか。

無職になる前は、仕事にやりがいを感じ、朝早くから夜遅くまで精一杯働いていたが、社会環境の変化や不景気の波を受け、望まない退職を強いられた方が3名、結婚という形をとらずに妊娠・出産を機に無職となった方が1名であった。

今回のインタビュー調査を通じてまずわかったことは、調査対象となった25~35歳の若者は、就職環境の非常に厳しい時代に社会に出た世代であったことをしっかりとおさえね

ばならないということだろう。これは、有職者・無職を問わずすべての若者に共通する要素であるが、とくに今回の無職の方へのインタビューからは、時代環境の急激な変化に強く影響された様子がよくわかる(p.80 解説・提言②を参照)。

次節では、これらのインタビュー事例とアンケート結果から、生活や働くことへの意識、子ども時代の体験、親のかかわりについて探っていきたい。なお、アンケート回答者のうち、無職のサンプルは全体で118名であり、首都圏に在住し、かつインタビューに参加できる人はごく限られていた。そのような中でインタビューにご協力いただいた4名の方に心から感謝の意を表したい。

第2節

インタビューを踏まえたアンケートの分析

● はじめに

第1部の就業形態別のデータからは、無職の若者は現在の生活や人間関係に対する評価が低く、子ども時代に対する評価も低い傾向がみられた。

この節では就業形態別で差がついたデータを中心に紹介し、無職の若者の現状を明らかにしていく。そして、第1節のインタビュー事例で上がった声を手がかりに無職の若者の悩みや不満を探っていきたい。

1. プロフィール

無職全体のプロフィールは、第1節 p.129の表2-1-1~表2-1-4を参照。

2. 生活時間

表2-2-1で就業形態別に起床・就寝の平均時間と睡眠時間の平均を、表2-2-2でテレビ・インターネット・家族との会話時間(電話を含む)をみていこう。

無職の若者は、朝は8時すぎに起床し、夜は午前1時すぎに就寝し、睡眠時間は7時間以上となっている。

また、テレビの視聴時間とインターネットをする時間は3時間以上と長く、とくにインターネットをする時間については他の就業形態と比較しても一番長い時間を費やしている。

おそらく仕事に時間を拘束されない分、活動に余裕があるのだろうか。

表2-2-1 起床・就寝の平均時間、睡眠時間の平均(就業形態別)

	正規社員	非正規社員	自営自由業	無職	専業主婦
起床時間	6時52分	7時17分	7時39分	8時30分	7時05分
就寝時間	24時32分	24時44分	24時47分	1時12分	24時09分
睡眠時間	6時間20分	6時間33分	6時間52分	7時間18分	6時間56分

表2-2-2 テレビの視聴時間・インターネットをする時間・家族との会話時間(平均)(就業形態別)

	正規社員	非正規社員	自営自由業	無職	専業主婦
テレビの視聴時間	1時間45分	2時間08分	2時間07分	3時間01分	3時間17分
インターネットをする時間	1時間27分	1時間55分	2時間16分	3時間15分	2時間20分
家族との会話時間(電話を含む)	53分	1時間11分	1時間23分	1時間15分	2時間26分

● インタビューから

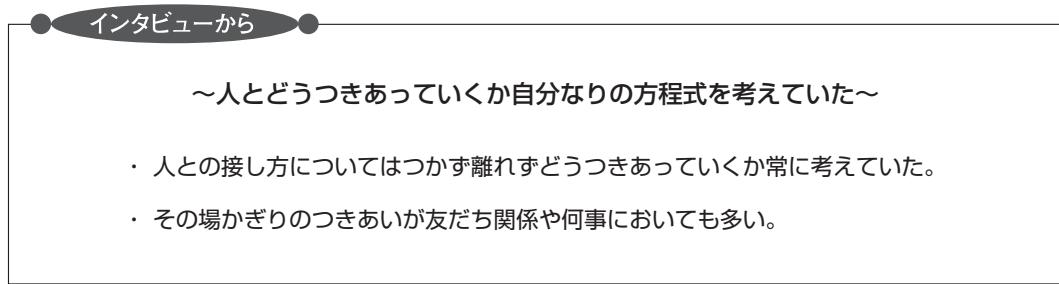
~朝はのんびり~

- ・生活はわりと不規則で曜日に関係なく朝起きる時間もまちまち。深夜2時頃に寝る毎日。
- ・インターネットを1日に4~5時間している。ネットショッピングや通販、懸賞をやっている。
- ・朝は8時にタイマーをセットして起き、テレビを見ている。

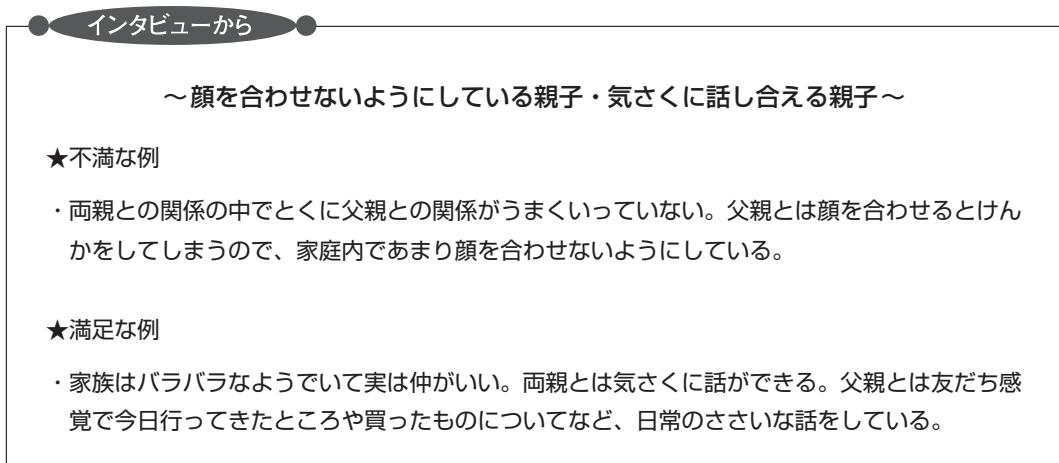
3. 人間関係

次に人間関係について就業形態別に「とてもそう」+「まあそう」の割合をみていく(図2-2-1①②)。

まず、友だとの関係についてみてみよう。いずれの項目をみても無職の割合が一番低いのが特徴である(図2-2-1①)。無職であるという状態がこのような傾向に結びついて



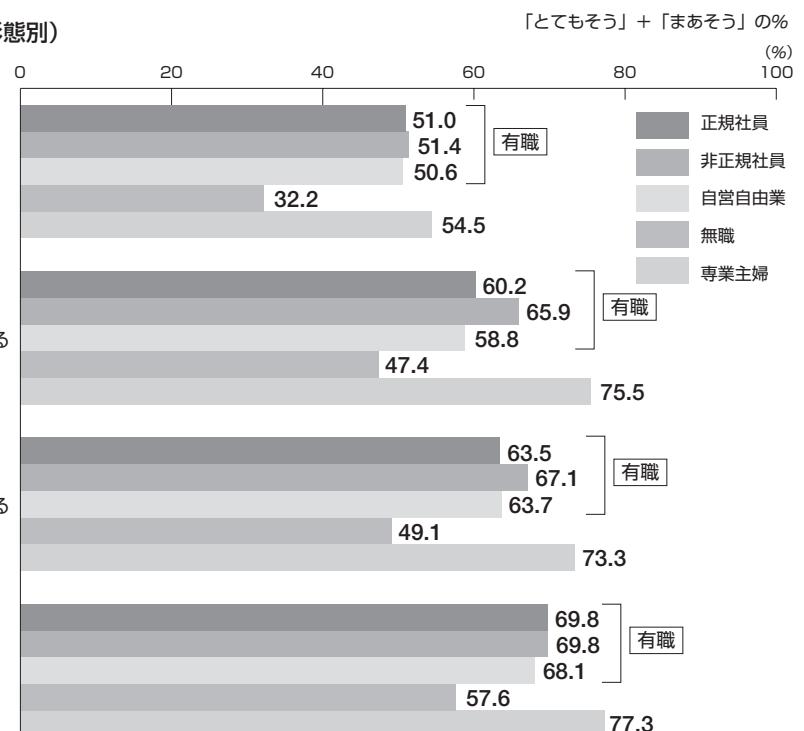
次に、親との関係をみていくと「よく話をする」では6割台と比較的高くなっている。しかし、「信頼されていると思う」では他の就業形態だとすべて6割以上だが無職は4割台と低い(図2-2-1②)。



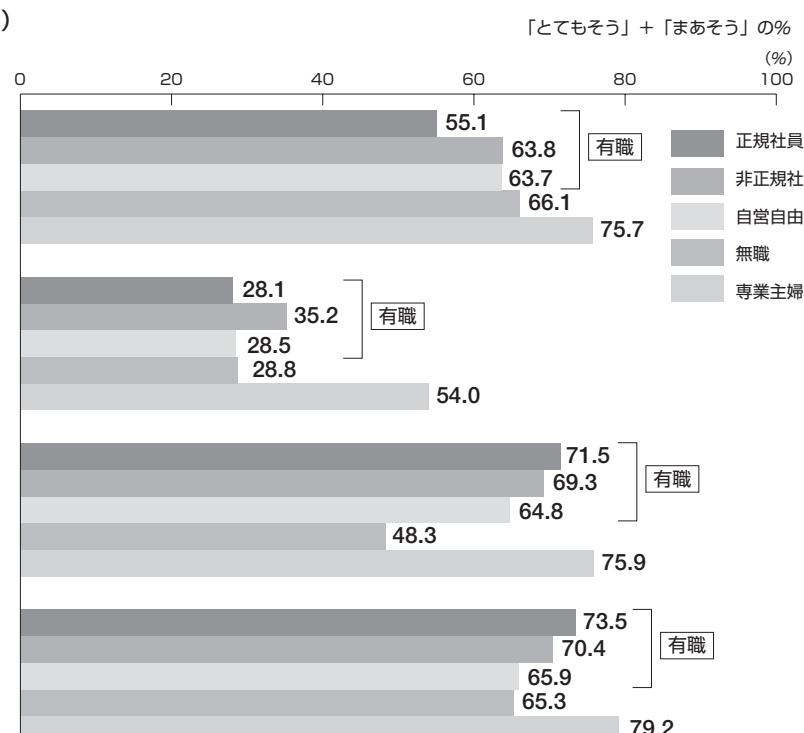
いくのかもしれない。職場の人間関係がないことが原因なのかもしれないし、無職という状況を知られるのが嫌だと思って人を避けてしまうことが原因なのかもしれない。また、前節のインタビュー事例にもあるように、子どもの頃にいじめられた体験がもとで、その後の人間関係にナーバスになってしまうこともあるのではないかと考えられる。

図2-2-1 人間関係

①友だちとの関係(就業形態別)



②親との関係(就業形態別)



4. 総合的な生活満足度と現在の生活について思うこと

① 総合的な生活満足度

現在の生活に対する総合的な満足度についてみると「満足している」（「とても満足している」+「まあ満足している」）割合は、有職ではいずれも5割前後だが、無職は2割強と低い（p.37 図1-4-2 参照）。

② 現在の生活について思うこと

では、現在の生活においてどのような点が満足で、どのような点が不満なのだろうか。

「とてもそう」+「まあそう」の割合をみ

● インタビューから

～自由な時間はあっても、経済的な不安や将来への不安でいっぱい～

★生活について満足な点

- ・今の状態で満足な点は、時間の自由が利き、自分のペースで時間を使えること。

★生活について不満な点

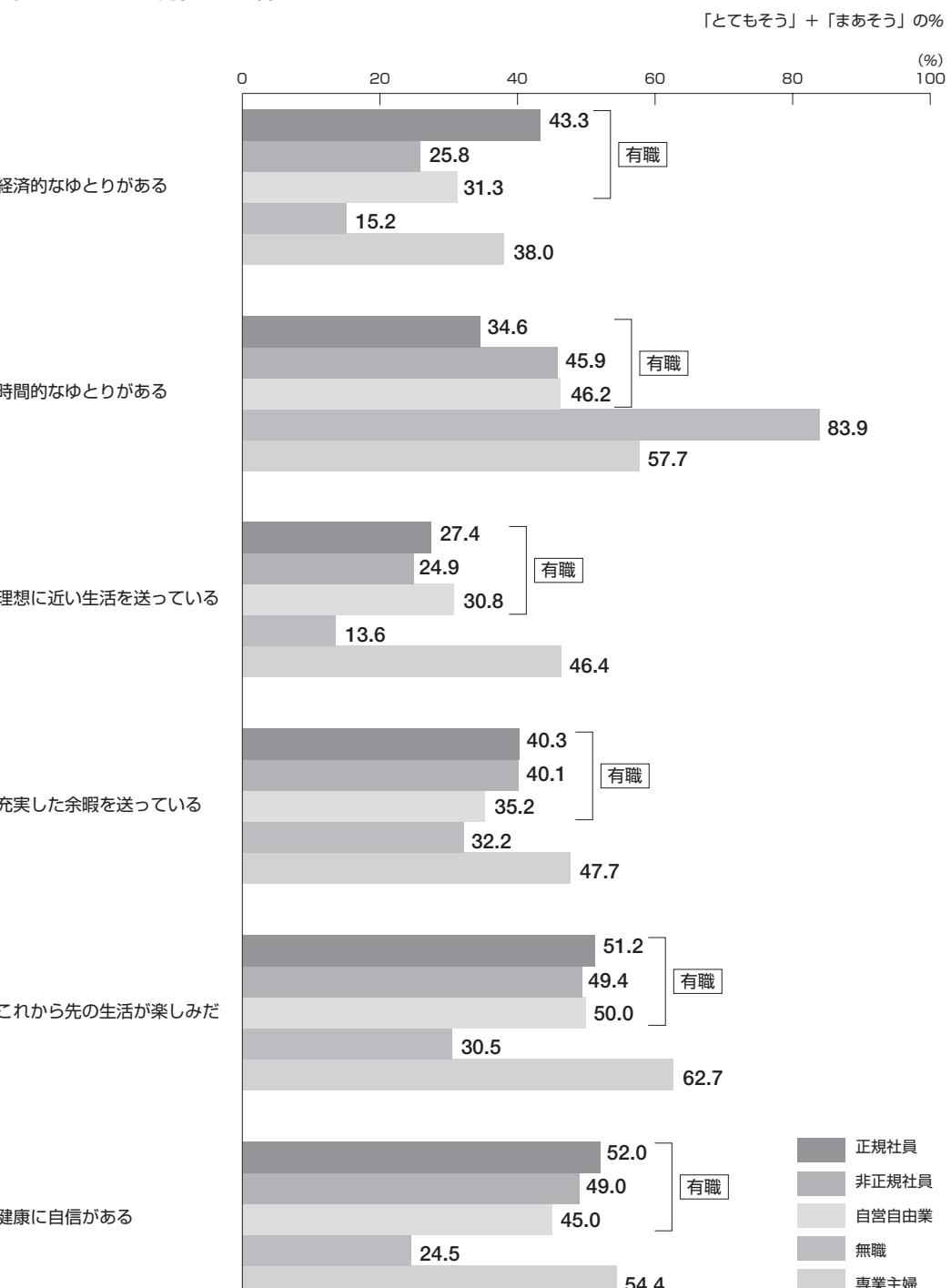
- ・今までちゃんと働いていたのに「このままではいけない」とのあせりの気持ちがある。
- ・金銭的には働いていないので、欲しいものが買えない。洋服やブランドもののバッグが欲しいけれど、今は我慢している。
- ・収入が安定していないので、早く就職したい。このままでは将来が見えない。
- ・経済的にもう少し収入が欲しい。

ていこう（図2-2-2）。

「時間的なゆとりがある」が8割を超え、他の就業形態と比べ突出している。しかし、その他の項目に関してはすべて低い割合であることが特徴である。

なお、「健康に自信がある」のは24.5%で約4人に1人と比較的少なくなっている。睡眠時間は長く、自由時間はあっても経済的な不安やこれから先のことへの不安を抱えるなどストレスフルな状態のため、無職の若者の中には健康に自信がない人もいるのかもしれない。一方で、健康上の理由で仕事に就いていないなどの事情を抱えている場合もあるのだろう。

図2-2-2 現在の生活について思うこと（就業形態別）



5. 就職についての意識

① 就職についての意識

無職の若者は、就職についてどのように考えているのだろうか（表2-2-3）。

無職全体をみると、「希望と違う仕事であっても働きたい」を選択した割合は15.3%、「希望の仕事があれば働きたい」が61.0%で、「働きたい」という意志のある人は76.3%と8割近くに達する。

インタビュー事例では、社会環境の変化や不景気のあおりを受け無職となってしまったが、それまでは仕事にやりがいやこだわりをもって真摯に取り組んでいたエピソードが聞かれた。無職の中にも働く意志をもっている人は、比較的多く存在していると考えられる。

「働いても働かなくてもどちらでもよい」が5.9%、「働きたくない」が7.6%と合わせて13.5%であり、「わからない」までを含めると18.6%となる。職業的に不活性な層なのかもしれない。

次に性別に傾向をみてみると、「希望の仕事があれば働きたい」と「働いても働かなくてもどちらでもよい」で10ポイントを超える大きな差がみられた。「希望の仕事があれば働きたい」は男性に多く（男性66.2%>女性

54.0%）、「働いても働かなくてもどちらでもよい」（男性1.5%<女性12.0%）は女性が多い。女性の場合は、結婚を控えて仕事から離れている人や家事手伝いをしている人がいるためではないかと思われる。

② もし働くとしたら、仕事をする上で重視すること

では、無職の人がもし働くとしたら、仕事をする上で重視することは何なのであろうか。

図2-2-3をみていくと、第1位が「職場の雰囲気がよいこと」（44.1%）、第2位が「自分のやりたい仕事であること」（41.5%）、第3位が「自分の個性や能力が生かせること」（37.3%）である。「職場の雰囲気がよいこと」が高い理由の1つとして、人間関係に不安や不信を感じた人たちがいるのかもしれない。第2位や第3位に関しては、前述の就職についての意識で、「希望の仕事があれば働きたい」との回答が6割以上であったことを考えると、仕事にこだわりをもっており、そのため「自分のやりたい仕事であること」や「自分の個性や能力が生かせること」を望んでいる人が多いからではなかろうか。

インタビューから

～やりがいのない仕事に就いてもしょうがない！～

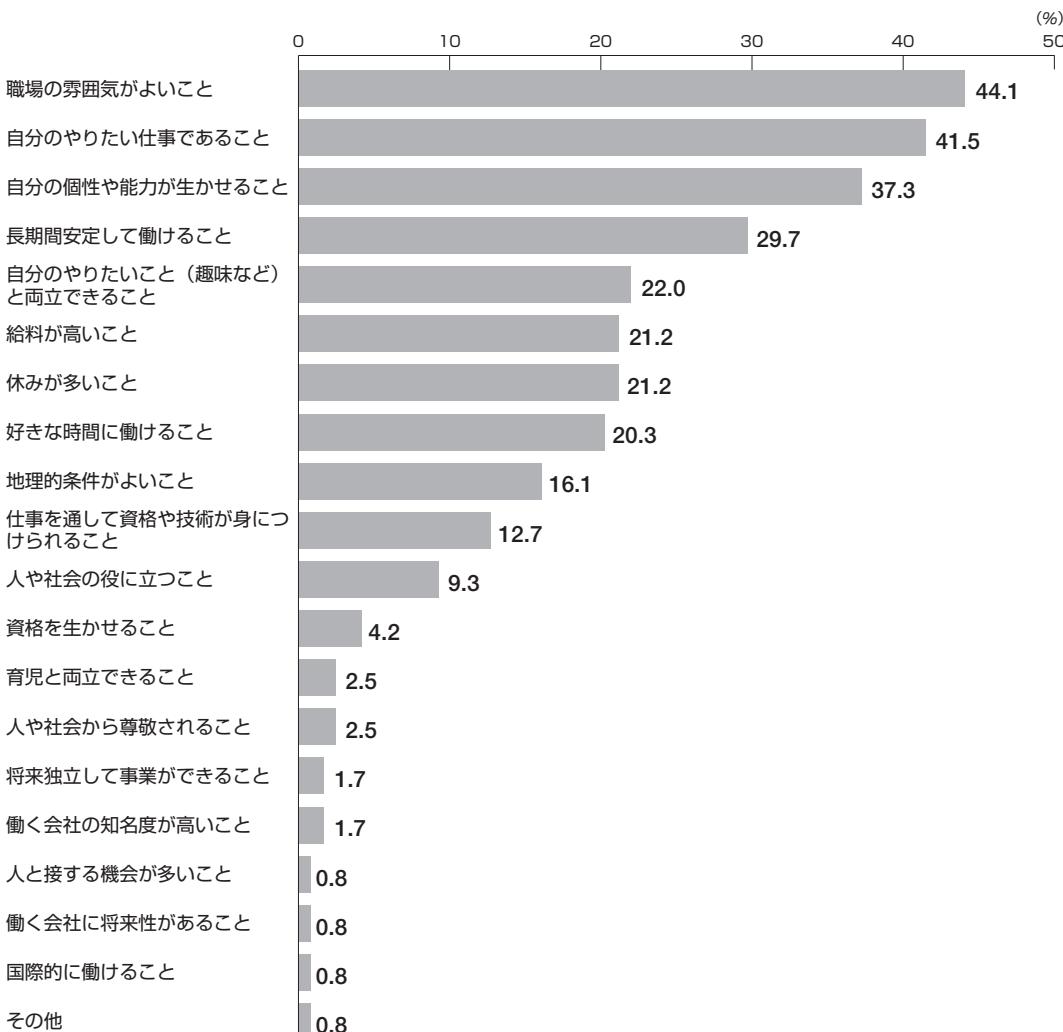
- ・働くのであれば「自分のやりたい仕事であること」を最重視している。やりがいのない仕事に就いてもしょうがないと思っている。自分にとってのやりがいは成果が見えることである。
- ・ハローワークなどの相談機関でたまに相談すると、いいことは言ってくれるが、客観的にみて本人の適性や希望を踏まえてアドバイスをしてくれているのか、今ひとつ信用できない。

表2-2-3 就職についての意識（性別）

	無職全体	男性	女性	(%)
希望と違う仕事であっても働きたい	15.3	14.7	16.0	
希望の仕事があれば働きたい	61.0	66.2	54.0	
働いても働かなくてもどちらでもよい	5.9	1.5	12.0	
働きたくない	7.6	8.8	6.0	
その他	5.1	4.4	6.0	
わからない	5.1	4.4	6.0	

注) 無職のみ分析。

図2-2-3 もし働くとしたら、仕事をする上で重視すること



注1) 無職のみ分析。

注2) 複数回答。「その他」を含む全20項目より3つまで選択。

6. 子どもの頃の様子

① 子どもの頃の体験

子どもの頃を振り返って、どのような体験をどのくらいしていたかをたずねた結果をみると、他の就業形態と比べ、子どもの頃の体験（「よくあった」+「ときどきあった」の割合）が少ないのが無職の若者の特徴である。

とくに他の就業形態と差が開いている項目は、「自然の中で遊ぶこと」「部活動に熱心に

取り組むこと」「地域の行事に参加すること（お祭りや子ども会など）」「受験のために熱心に勉強すること」「親や学校の先生以外の大人と話すこと」などであった（p.68 図3-1-2 参照）。

以下、インタビューの声から子どもの頃の交流体験についてピックアップしたが、子ども時代に友だちや大人とあまりかかわっていない姿もうかがえた。

インタビューから

～子どもの頃の他者との交流で印象に残っている経験はない～

- ・親以外の年上の人とのつきあいで印象に残っていることはない。
- ・交流のあった大人の存在、あこがれた大人の存在はない。
- ・好きとか嫌いになつたりする感情を抱くほど、小学生から高校生まで印象に残った先生の存在もとくにない。

② 子どもの頃の親の様子

子どもの頃の親の様子についてはどうだったのだろう。「とてもそう」+「まあそう」の割合をみてみると、無職では「手作りの料理を出してくれた」以外の多くの項目で、他の就業形態よりも肯定する割合が低い。他の

就業形態と比較し、差のみられた項目は「誇りをもって仕事をしていた」「人づきあいを大切にしていた」「家族の仲がよかった」「楽しそうに生活を送っていた」などであった（p.71 図3-2-2 参照）。

インタビューから

～両親は私が子どもの頃、悩みや不安を抱えていたのではないか～

- ・周りからは、家族仲がよいと思われていたが、それぞれが問題を抱えていた家族だったと思う。父親と母親の間はやや溝があったのではないかと思う。
- ・両親は仕事や子育てのこと、住宅ローンのことなどそれぞれが悩みや不安を抱えており、そのためささいなことで言い合いになり、ケンカすることもあった。

③ 子どもの頃の親のしつけ

子どもの頃の親のしつけについてみていく。どんなことを重視して子育てをしていたのだろうか。

しつけで「重視していた」（「とても重視していた」+「まあ重視していた」）の割合をみていくと、すべての項目において、無職では他の就業形態より低い傾向がみられた。

インタビューから

～子ども時代は友だちづくりより塾や習い事が優先～

- ・小学校時代から親に塾や習い事を優先させられた。毎日が忙しく友だちがいなかった。
- ・両親ともしつけに関して甘く、あまり怒られた記憶はない。また何かを我慢させられたという記憶もほとんどない。
- ・親はやりたいことをやらせてくれた。

④ 子どもの頃の得意だったこと

最後に、子どもの頃どのようなことが得意だったのだろうか。「得意だった」（「とても得意だった」+「やや得意だった」）の割合をみていくと、全般的に無職の割合が低い項目が多い。

とくに他の就業形態との間に開きがみられた項目は「スポーツをしたり体を動かしたり

とくに他の就業形態と比較して差のみられた項目は「自分でできることは自分でやること」「嫌なことでも我慢してやること」「友だちを大切にすること」「先生の言うことをしっかり聞くこと」「自分のやりたいことを大切にすること」などであった（p.74 図3-3-2 参照）。

すること」「いろいろな友だちと仲よくなること」であった（p.79 図3-5-2 参照）。

前述（p.140）の「3. 人間関係」でみたように、無職では、友だちとの関係に満足していない人が多かった。子どもの頃に「いろいろな友だちと仲よくなること」が得意でなかったと回答しているタイプが多いことと関連しているのかもしれない。

インタビューから

～人とのつきあいに敏感になっていった子ども時代のいじめられ体験～

- ・小学校高学年になってからいじめにあった。「自分ってこんなもんなんだ」と重く受け止め、「とにかく我慢しないとこの中では生きていけない」と思い、誰にも相談せずに耐えていた。
- ・小学校の時、塾通いや習い事で忙しく友だちはいなかった。友だちはいなくて当然だと思っていた。

第3節

無職の若者の世界 まとめ

以上、就業形態別でみたアンケート結果を中心にインタビューの声を交えながら無職の若者の実態を追ってきた。

単にデータから無職の状況を概観する以上に、インタビューの声からは彼らの不安や悩みが浮き彫りになったのではないだろうか。

分析からは次のような特徴がみえてきた。

1) 生活時間

アンケート結果からは、仕事がないためか、平日と休日の差がなく、朝は遅く起き、夜は遅く寝る不規則な生活を送っている様子がうかがわれた。インターネットの時間も長く、インタビュー事例のように、ネットショッピングや懸賞をしている若者もいると思われる。

2) 現在の親子関係

インタビューからは、親と顔を合わせないように気を遣っているケースがある一方で親と気さくに何でも話し合える関係などもあり、それぞれのケースによって異なった。無職の状態を快く受け入れる親もいれば、世間体や家庭内の経済的な要因から親もストレスを抱えているような状況が浮かび上がってきた。

3) 生活の様子

アンケートからは、自由な時間はたくさんあるが、無職のために金銭的には厳しい状況であることがうかがえた。

インタビューからは、将来への大きな不安を抱えている様子がうかがわれた。

4) 就職についての意識

アンケート結果では無職のうち8割近くが何らかの形で働きたいと思っていることがわ

かった。

インタビュー事例では2名が希望の仕事があれば働きたいと切望していた。しかし、「やりがいのある仕事」や前職と同じような待遇や職種を希望するなど、希望の仕事にはこだわりがある様子がうかがえた。また、就職の相談機関に対する不満の声も上がっていった。現状では本人の適性や希望を踏まえて的確なアドバイスがなされていないのかもしれない。

5) 子ども時代の体験や親のしつけ

子ども時代の体験や家庭の様子に関してみると、アンケート結果からは、他者との交流体験は少なめで、リーダーシップをとったり、友だちと仲良くなることは得意ではない様子、また、親は楽しそうに生活していない、家族仲がよくないような家庭の様子がうかがわれた。ただし、現在無職という状況なので、過去の評価も低くなる可能性も考えられる。

インタビューからは、両親がささいなことで言い合いをしていたことなどを思い出したケースや、子どもの頃の友だち関係があまりうまくいっていなかったケースもあった。子ども時代の他者との交流体験は少なく、印象に残るような大人の存在がなかった様子もうかがえた。

次に、親のしつけに関してみると、アンケート結果からは、自分でできることは自分でやる、嫌なことでも我慢してやる、友だちを大切にする、自分のやりたいことを大切にするなどを重視する割合が低めとなっていた。インタビューからは、友だちをつくることよりも塾や習い事を優先させられたり、甘やかされたりとそれぞれのケースで異なった様子がみられた。

第2部 分析編

第3章

専業主婦の世界

神田和恵 (1～3節)

この章では、専業主婦の分析を行う。今回のアンケート調査では、「無職」の回答者の割合が全体の23.2%を占め、そのうち無職の既婚の女性、すなわち専業主婦が約8割を占めていた。

第1部において総合的な生活満足度を就業形態別にみたところ、専業主婦の生活満足度が7割以上と高い傾向がみられた。また、友だちや親との人間関係や現在の生活においても肯定的な回答の割合が高かった。

ここでは、専業主婦の生活満足度や人間関係の肯定感が高い要因をインタビュー調査とアンケート結果から明らかにしていきたい。